

「人から聞いた話なんだけど。」

そう言つて、ながおくんは話し始めました。

ある人が就職活動の面接で経験したこと。そういう話のようです。

「やあ、こんにちは。私がこの会社の社長です。」

恰幅の良いその社長は、紺のスーツに紺のストライプのネクタイという一見地味な装いに身を包んでいました。服の印象のせい、袖口にのぞく四角の大きなカフスポタンが、やけにきらきらと目を刺激しました。

靴ブラシのような口ひげをもごもごさせながら、社長はあいさつを続けました。

「より良い社員、さらには、道義と礼節をわきまえた、より良い社会人を育成するために、我が社では一つのルールを設けています。それは、受け取ったものは贈ってきた相手に返してはいけない、ということです。つまり、受け取ったらそれを贈った人とは違う人にお返しをすること。これを我が社のルールにしています。」

贈り物をした人へそのまま返すのであれば、やり取りが二人の間で終わってしまいます。それだと贈りものの輪が広がっていきません。逆に、お返しを、贈ってくれたのとは別の人にすれば、そこかしこに贈り贈られの関係が生まれます。

言ってみれば、そうやって社会は成り立っているんですね。そうやって人の輪が広がっているんですね。ですから我が社もそれにならつてですね、社会貢献の一環として、社員同士のやり取りにも反映させようと考えておる次第なのであります。ですから、入社した暁には、ぜひとも、くれぐれも、このルールを守っていただきたい。」

——自分にされた親切は違う人に返せというわけか。ここは社員の教育に力を入れている会社なんだな。

多忙なスケジュールの合間を縫ってここに来たのでしようか、社長は、あいさつを述べた後、「では。」と言つて、三人の面接官が座る長テーブルの前を横切り、部屋から出て行ってしまいました。

いよいよ、面接官との対話が始まる。手がじんわりと汗ばんできます。あらかじめ用意しておいた受け答えのリストを頭の中に巡らしながら、増してくる緊張感を抑えようとしてきました。

「では、本社を志望する動機をお聞かせ願えますか？」

三人の面接官のうち、年長者らしき中年の男性がそう話しかけました。

予想通りの展開に、準備した答えの引き出しに手をかけます。

——私が御社を志望した動機は・・・

そう答えようとした矢先、年長者は私の応答をさえぎるようにして、言葉を継ぎました。

「そうですね。当社は何よりも社員の教育に力を入れています。このような教育体制によりまして、わたくしどもの会社が社会で求められる存在として認められているわけなのです。つきましては・・・」

——は、はあ・・・

「・・・会社の外に出てもわが社の名に恥じぬような、そして、礼節と道義を兼ね備えた人材を育成しようと考えているのです。では、志望動機をお伺いしましょうか。」

こちらに質問しておきながら、なぜ自分が話すのでしょうか。怪訝に思いながら、再度、応答を試みます。

すると、話し終えた年長者は、ガタリと音を立て、「では。」と言って部屋を出て行ってしまうました。

——え？

なぜ出て行くのでしょうか。一方的に話して出て行ってしまふ。違和感を通り越して、この面接官、そしてこの会社に対する不審の気持ちがむくむくとわいてきます。

年長者が出て行くのとほぼ同時に、最初に話をした社長が部屋に戻ってきました。社長は、端のイスにどっかりと体をうずめ、靴ブラシのようなひげを、ほくほくとなでています。

状況を納得できないまま、社長と残された二人の面接官に目を向けます。年長者よりは少しだけ年下らしい面接官のうちの一人の男性が、手のひらを上に向けてこちらに差し出し、どうぞ、というジェスチャーを示しました。

——え？続きをどうぞ、という意味でしょうか？

思わず口にした言葉に対して、その男性は何も答えません。その代わり、さつき入ってきた社長がうんうんとうなずきました。腑に落ちないまま、用意した当たり障りのない志望動機を読み上げました。自分が発しているはずの言葉が、どこか遠くで響いている感じがします。

口上を読み上げた後、自分の気持ちがあやや好戦的になっているのを感じました。この人は何なんだ。そういう思いが、まな板の上の鯉であった自分を、少しだけたくましい戦士へと脱皮させたような気がしました。

聞き終えた男性は、私に言葉を返すことなく、私よりも少しだけ年上らしいもう一人の若い男性面接官に、何ごとかをよこによと吹き込んでいます。

——あ・・・

私がそう言いかけた時、先の年長者のように、「では。」と言って、その男性も出て行ってしまいました。

これはもう異常事態です。この異常さを高らかに表明しなければならぬ。そんな気になりました。

すると、がちやりと言う音とともに、さつき出て行った年長者が部屋に入ってきました。

——え？

「分かりました。では、本社に入社した場合、どのような仕事をしたいとお考えですか？」不意に、若い面接官が私に質問しました。

——受け取ったらそれを贈った人とは違う人にお返しをすること。——

ルールが、私の頭をよぎりました。

社長がにやりと笑うのを見た気がしました。